書道用語一覧

●内の数字は、本文の主な掲載ページを示す。

あ行

いん［印］86
石や木などの用材に文字を刻したもの。印章。

うんぴつ［運筆］6
字を書くときの、筆の運び方の総称。

えんせい［円勢］
「鄭羲下碑」などに見られる丸みを帯びた字形。
⇔方勢

鄭羲下碑

か行

かいし［懐紙］
懐に入れておき、必要に応じて漢詩や和歌、手紙などを書きつける用紙。半分にしたものを半懐紙という。

かいしょ［楷書］6
漢字の書体の一つ。五書体の中で最後に成立した。一つ一つの点画が独立しており、現代では最も標準的な書体。

がごう［雅号］
書家などが、本名以外に用いる名前。

かごじ［籠字］90
手本から文字の輪郭だけを写し取ったもの。

がせんし［画仙紙］
書画に用いる大判の用紙。

からよう［唐様］
中国風の書。主に江戸時代に流行した、宋・元・明代の影響を受けた書風をさす。⇔和様

きごう［揮毫］
「筆を揮う」の意。筆で書画などをかくこと。

きひつ［起筆］13・54
点画の書き始めの部分。始筆ともいう。

ぎょうしょ［行書］6
漢字の書体の一つ。隷書の速写体として生まれた。読みやすく速く書けるので、実用書体として現代でも広く使われている。

きれ［切］
巻子本や冊子本などに書かれていた古筆が、鑑賞用に分断されたもの。断簡。（例）「高野切」

きんぶん［金文］12
主に殷・周時代に作られた青銅器などの金属器に、鋳込まれたり刻まれたりした文字。

こうこつぶん［甲骨文］12
亀の甲羅や獣の骨に刻まれた文字。現存する最古の漢字と考えられる。

こうせい［向勢］
向かい合う縦画が外側に膨らむように書かれた楷書の字形。⇔背勢

顔氏家廟碑

こくじ［刻字］91
木や石などの用材に筆意を踏まえて文字を刻す表現のこと。書道の一分野。

こてん［古典］2
書道では、古人の優れた筆跡を指す。書道の学習の手本となるもの。

こひつ［古筆］2
日本の古人の優れた筆跡。平安時代に書かれた仮名の書をいうことが多い。

さ行

さんせき［三跡］32
小野道風・藤原佐理・藤原行成のこと。日本的な書風（和様）を確立した。

さんぴつ［三筆］
空海・嵯峨天皇・橘逸勢のこと。中国の書法を基盤としつつも、日本的な個性の感じられる書風を生み出した。

しきし［色紙］
詩文や和歌を書くための方形の用紙。

しゅうじ［集字］34
さまざまな筆跡から目的に応じて必要な文字を集めること。

しゅうひつ［収筆］54
点画の書き終わりの部分。終筆ともいう。

じゅんかつ［潤渇］39
墨のにじみとかすれ。

しょうてん［小篆］12
篆書体の一つ。秦の始皇帝の文字統一によって制定された書体。左右相称で縦長の字形が特徴。

じょうふく［条幅］
全紙（約70cm×約135cm）を縦長に切った用紙を軸装したもの。

しょたい［書体］3
文字の様式のこと。漢字には、篆書、隷書、草書、行書、楷書の五書体がある。

しょふう［書風］3
書き手によってさまざまに生じる書の趣のこと。書きぶり。

しょほう［書法］6
文字を書く方法の総称。執筆法、運筆法、用筆法など。

しんせき［真跡］
その人物が実際に書いた書画のこと。真筆ともいう。

せきひ［石碑］15
後世に伝えるために、銘文を石に刻して建立したもの。

そうしょ［草書］6
漢字の書体の一つ。篆書や隷書の速写体として生まれた。点画を最も簡略化した実用書体で、仮名の母体となった。

そうひつ［送筆］13
点画の起筆と収筆の中間の部分。

ぞうほう［蔵鋒］13
起筆における用筆法の一つ。穂先を、点画の中に包み込むように運筆する。⇔露鋒

た行

だいてん［大篆］12
篆書体の一つ。小篆の成立以前に、統一前の秦で使用されていた。籀文ともいう。

たくほん［拓本］36
石や金属に刻されたり鋳込まれたりした文字や文様を、墨などを用いて紙に写し取ったもの。

ちらしがき［散らし書き］2
空間美を意識し、書きだしの位置や行の長さ、行間などに変化をつける、仮名特有の構成法。

でん［伝］
古来伝称されている筆者名を意味する。仮名の古筆など、筆者が明確でないものに多くつけられている。（例）「伝 紀貫之」

てんかく［点画］6
文字を構成する点と線のこと。漢字の書に用いられることが多い。

てんこく［篆刻］86
主に篆書を用いて石などに文字を刻し、印を作ること。書道の一分野。

てんしょ［篆書］6
漢字の書体の一つ。甲骨文、金文、小篆など、隷書が生まれるまでの文字の総称として用いる。

てんせつ［転折］13
直角に近い形で点画の方向を転換した部分の言い方。

とうのしたいか［唐の四大家］
欧陽詢・虞世南・褚遂良・顔真卿のこと。唐代に楷書の書法を完成させた。

な行

のうしょ［能書］6
文字を書く技が優れている人のこと。

は行

はいせい［背勢］42
向かい合う縦画が内側に反るように書かれた楷書の字形。⇔向勢

九成宮醴泉銘

はいれつ［配列］
用紙に対して字間・行間、行の中心、上下左右の余白などを考え、文字を適切に並べること。

はたく［波磔］20
隷書において、横画の収筆を右に大きくうねらせて払い出す書き方、および右払い。

はっぷん［八分］21
隷書体の一つ。波磔をもつ、装飾的な書体。漢代に生まれた。

ひつい［筆意］
用筆に込められた書き手の意図や心情。

ひつみゃく［筆脈］29・54
点画の一つ一つが、気持ちのうえで、また形のうえでもつながりをもつこと。

ふうしゅ［風趣］
書においては、書き手の思いや表現、素材によってさまざまに生まれる趣のこと。

ぶんぽうしほう［文房四宝］
筆・紙・墨・硯のこと。詩文や書画をかくときに最も重要とされた文房具。

へんたいがな［変体仮名］
現在使われている平仮名とは字源が違う仮名や、字源は同じでも形が大きく異なる仮名。

ほうしょ［倣書］
古典の筆法や書風を理解し、その技法を用いて他の文字を書くこと。創作への足がかりとなる学習方法の一つ。

ほうじょう［法帖］
拓本を、臨書の手本や鑑賞のために本の形（剪装本）に仕立てたもの。

ほうせい［方勢］
「牛橛造像記」などに見られる角張った字形。
⇔円勢

牛橛造像記

ま行

まんようがな［万葉仮名］
日本語を、漢字の音を借りて表記した文字。『万葉集』が成立した奈良時代に多用された。

もっかん［木簡］
文字を書きつけるための素材として用いられた木の札。紙が実用化するまで、日本や中国で盛んに用いられた。

や行

ようひつ［用筆］17
筆の使い方のこと。起筆・送筆・収筆での筆の扱い方や穂先の動かし方など、その内容は幅広い。

ら行

らっかん［落款］
書画に署名を入れ、印を押すこと。署名の後に「書」「かく」などと記すのが一般的で、季節や年月日などを加えることもある。

りょうし［料紙］63
仮名の書に多く用いられる、表面に加工や装飾を施した用紙のこと。

りんしょ［臨書］3
古典や古筆を手本にして書き、その技法を学ぶこと。書道の学習法で最も多く行われている。

れいしょ［隷書］6
漢字の書体の一つ。篆書を簡略化し、速書きする中で生まれた。うねるような運筆リズム（波勢）と、払い出す用筆（波磔）が特徴。

れんめん［連綿］54
漢字の行書・草書や仮名の書で、二文字以上をつなげて書くこと。

ろほう［露鋒］
起筆における用筆法の一つ。穂先が点画の端に表れるように運筆する。
⇔蔵鋒

わ行

わよう［和様］
優雅で流麗な日本風の書。小野道風・藤原佐理・藤原行成ら三跡によって確立された。
⇔唐様